

演題番号：

演題名：豚の白血病の1例

発表者氏名：中山智之¹⁾、宇根有美²⁾

発表者所属：1) 滋賀県食肉衛生検査所、2) 麻布大学獣医学部病理学研究室

1. はじめに：平成21年6月、と畜検査において豚白血病1症例を発見したので報告する。本症例は、本県で初めて確定診断、報告する豚の白血病だと考える。

2. 動物名：豚(県内産)、品種：LWD、性別：牝、月齢：6ヶ月齢

3. 生体所見：一般畜として搬入され、特に著変は認めなかった。

4. 肉眼所見： 肝臓：境界明瞭な小豆大から大豆大の灰白色結節を複数個、主に肝臓の辺縁部に認めた。断面にも灰白色結節を数個認めた。 左腎；拇指頭大の境界やや不明瞭な灰白色結節を1個認めた。 右腎；小指頭大の境界明瞭な灰白色結節を1個認めた。 浅頸リンパ節；やや腫大していた。 胸腔膜；左枝肉の肋骨部2カ所、右枝肉の肋骨部1カ所に赤色、灰白色混在のやや膨隆化した結節を認めた。

小腸および腸間膜；小腫瘤が多発していた。 内腸骨リンパ節；やや腫大を認めた。 心臓、脾臓、頸筋、背最長筋およびその他臓器；著変を認めなかった。

5. スタンプ標本所見(ディフ・クイック染色)： 肝臓；大小不同の異型リンパ球を散見した。 左右腎臓、浅頸リンパ節、胸腔膜、内腸骨リンパ節；全てに大小不同の異型リンパ球を高度に認めた。右腎および浅頸リンパ節には、核分裂像を認めた。

頸筋、背最長筋；著変を認めなかった。

6. 組織所見： 肝臓；肝包膜下、肝小葉間に腫瘍細胞の浸潤を認めた。肝細胞域から徐々に腫瘍細胞域へと移行していた。腫瘍細胞はクロマチン粗で数個の核小体を有する淡明な核と乏しい細胞質から成る細胞であった。 腎臓；正常尿細管と腫瘍部を明確に区分けする構造はなく、前者から後者に徐々に移行していた。腫瘍部は、クロマチン粗で数個の核小体を有する淡明な核と乏しい細胞質から成る腫瘍細胞により構成されていた。腫瘍部辺縁は、まだ尿細管を見受けるが、中心に向かうに従い尿細管は消失していた。腫瘍全体に索状の結合組織を認めた。 浅頸リンパ節；腫瘍細胞の著しく高度な浸潤を認めた。 胸腔膜；腫瘍細胞からなる膜構造を認めた。

内腸骨リンパ節；一部にうっ血を認めた。 頸筋；脂肪部に腫瘍細胞の浸潤を認めた。 背最長筋；著変を認めなかった。

7. 免疫組織化学的検索結果：腎臓、肝臓、胸腔膜で増殖していた腫瘍細胞はCD79に強陽性、BLA36に陽性で、CD3に陰性を示した。

8. 病理学的診断名：B細胞性リンパ腫 疾病診断名：豚の白血病

9. 考察：本症例は全身的に腫瘤が存在し、各腫瘤を構成する腫瘍細胞の形態はほぼ同様でリンパ球様細胞であり、また免疫組織化学的検索においてこれらの細胞がCD79 および BLA36 に対する抗体に陽性を示したことから B リンパ球が腫瘍性に増殖した B 細胞性リンパ腫と診断した。豚のリンパ腫の判定基準について、全国食肉衛生検査所協議会病理部会において検討されたが、豚のリンパ腫は限局性であっても豚白血病として全部廃棄している機関や、1臓器のみの病変である場合、一部廃棄とする機関と異なりが認められる。豚のリンパ腫の検出率は、10万頭あたり1頭前後であり、今後は、他機関と協力して豚のリンパ腫の症例を集め、採取部位を含めた検査手法の検討および判定基準の検討が必要と考える。